

國學院大學図書館新蔵書八雲軒本『萬葉集』について

多田元

一、はじめに

國學院大學図書館では昭和六十三年十二月『萬葉集』写本二十三冊（八雲軒脇坂安元旧蔵）を購入した。八雲軒脇坂安元は歌道に秀で、凶書の蒐集に力を注いだといわれており、小野則秋氏の『日本文庫史』に次のように記されている。^三

安治（父）は致仕の後京都西洞院に閑居し烏丸光広に交り和歌を嗜み、母も西洞院宰相の女で文学の才があり、父母の血を受けた安元も亦歌道に秀でて八雲軒と号した。元和三年（一六一七）大洲から飯田に転封したが、この地の文学は実に安元に起こると伝へられ、父祖以来文事に深い家で凶書を蓄へ、就中安元が最も蒐集に力を注いだところで、その蔵書数千卷^{云々}

その蔵書には号「八雲軒」の蔵書印が捺されているため八雲軒本と称される。以下それに倣い本書を「八雲軒本『萬葉集』」と呼称する。

八雲軒旧蔵本は、金井寅之助氏によれば、尊経閣文庫・静嘉堂文庫・内閣文庫・凶書寮・穂久邇文庫・東京大学図書館・天理図書館等に架蔵され、また蒐書家に珍重され各所に所蔵されているという。中でも尊経閣蔵「尊卑分脈」は国史大系本の底本に

用いられ、松井博士蔵「更級日記」は御物定家本の忠実な写しであるなど善本に恵まれているとい^(三)う。同じ上代の作品としては「八雲軒本古事記」が天理図書館に蔵されている。

二、書誌

『萬葉集』 二十三冊（木箱入り、ただし後造のもの、箱底に帙の残骸有り）

表紙 丹表紙^(三) 出繋ぎ（紗綾形） 桔梗唐草 艶出

外題 題簽なし 左肩上にうちつけ書き「萬葉集 目錄上（下）」・「萬葉集 歌人姓名」・「萬葉集一（二）」（ただし卷二十には左肩に小字「畢」有り）

内題 墨付一丁一行目に「萬葉集目錄上（下）」・「萬葉集歌人姓名」・「萬葉集卷第一（二）」

体裁 袋綴 楮紙 大本 縦二九・四糎、横二〇・〇糎

丁数 目錄上 七十七丁（遊紙前一丁・後一丁 以下断らない限りこれに同じ）、目錄下 四十五丁、歌人姓名 三十六丁（遊紙前なし）、卷一 二十九丁（遊紙後なし）、卷二 四十三丁（遊紙後なし）、卷三 六十三丁、卷四 六十五丁、卷五 四十四丁、卷六 五十一丁、卷七 五十丁、卷八 五十五丁、卷九 四十丁、卷十 七十五丁、卷十一 五十五丁、卷十二 四十七丁、卷十三 四十二丁、卷十四 四十一丁、卷十五 四十五丁、卷十六 三十五丁、卷十七 五十四丁、卷十八 四十丁、卷十九 五十九丁、卷二十 六十六丁

字数 一面七行・十八字（希に十六〜二十字）

奥書 なし

書入 卷一にのみ別筆・朱の書入あり（ただし墨付き十七丁ウ四行目まで）

蔵書印 各卷墨付一丁下部に「八雲軒」長方形印 縦五・六糎、横三・〇糎 陰刻

本人麻呂」「笠朝臣金村」を作者として記す。

五 左注を題詞下に割注によって記し、また或本歌も前の歌の最後に割注形式で記す。

六 歴史的仮名遣いの誤りが多い。「大オホ→ヲホ」「怜河オモシロキ→ヲモシロキ」「思・念オモフ→ヲモフ」「行方ユクへ
↓ユクエ」など。

この特徴は『校本萬葉集』『万葉集諸本解説』の分類によると第三部第四種改定本に相当し、そこに掲げられている「前田家一本萬葉集」「白雲書庫本萬葉集」と同類である^(四)（但し六の特徴について「万葉集諸本解説」では何も触れていない）。特に後者は行数・字詰も一致する。両者とも江戸初期の書写によるものと推定されているが、八雲軒本は所持者脇坂安元によって明らかにこの時期の書写であることが確認出来る。この三本が同形態であることから同一本文を有すると考えられるが、この系統の本は『校本萬葉集』の校合に用いられていないため、総てを確認することは出来ない。しかし『校本萬葉集』『諸本輯影』^(五)の写真九葉を見る限り間違いのないところであると思われる。

それは校本「諸本輯影」第二百八（前田家一本萬葉集 その五）に掲げる目録部分が、体裁・本文・字体総て八雲軒本と一致すること、同第二百四（前田家一本萬葉集 その一）・同第二百九（白雲書庫本萬葉集 その一）に掲げる巻一冒頭部分が、体裁・本文・訓・字体がほぼ八雲軒本（口絵1）に一致することなどから確認出来る。

目録部分の体裁（口絵1）で言えば、まず総て訓を欠く点、次に、一行目「萬葉集目録上」に続き二行目に巻数「卷之一」を一字下げ、三行目に部立「雑歌」を二字下げ、四行目に御代「泊瀬朝倉宮御宇」を三字下げし、五行目に題詞「天皇御製一首」を高く記している点総て共通する。但し八雲軒本は一面七行書き、前田家一本は八行書きである。この部分は例えば、寛永版本、西本願寺本、元暦校本などでは、巻数・御代を高く、部立・題詞を低く記す。

同じく目録部分の本文は総て共通する。御代表記「泊瀬朝倉宮御宇」などは諸本この下に「天皇代」を記し、題詞「天皇御製一首」は諸本「天皇御製歌」と記す（元暦校本・神田本―『校本萬葉集』の呼称による―には「歌」ナシ）。

巻一冒頭部分の体裁は先に述べた特色の通りであるが、前田家一本・白雲書庫本とほぼ同一である。八雲軒本（口絵1）に則

して検討すると、一行目「萬葉集卷第一」の次行一字下げで「雑歌」、次行二字下げで御代「泊瀬朝倉宮御宇」その下割り注二行書き「太泊瀬稚武天皇、坂谷是也」が四行目にかけて記される。五行目「一首」（題詞の続き）、この部分白雲書庫本は脱落。六行目は作者名として八字下げ。但し前田家一本は十字下げ。また前田家一本は一面八行書き、二十字詰めである。八雲軒本と白雲書庫本とが行数・字詰めが一致することから、この二本の形態が祖本の忠実な写しであることが想像される。

この冒頭部分の訓も三本総て一致する。但し白雲書庫本は後人の書き入れが多数ある。特に注意されるのは、三行目割り注の「太泊瀬稚武」の訓「ヲホハツセワカタケ」の部分である。『校本萬葉集』によれば、「ヲホハツセ」と付訓するものは見えず、この系統三本一様に「ヲホ」と歴史的仮名遣いを誤っていることは、祖本に忠実な写書によるものと考えて良く、先に述べた八雲軒本の訂正法から写書態度が忠実であったと推定したことが立証されるからである。

以上八雲軒本・前田家一本・白雲書庫本が同一の祖本をもつことを確認し、八雲軒本・白雲書庫本が恐らく祖本と同一の体裁を伝えるものと推定した。

この本の系統は奥付類が全く無いが、幸いなことに『萬葉拾穂抄』がこれと同じものを底本に用いているためにその素性を知ることが出来る。「拾穂抄」の本文の特徴とこの系統の本文が類似していることは武田祐吉氏に次の指摘がある。^(六)

この改定本と類似の形をとつてゐるものに拾穂抄の本文がある。それは本文を平仮名としその傍に漢字を添へてゐる。また目録および作者の表が無いが、その他体裁の点に於いて前田家一本の流と同一の様式を取つてゐる。

「拾穂抄」本文の特徴とこの系統の本とが一致しているものを、野村貴次氏が挙げられた「拾穂抄」の特徴から抜き出してみる。^(七)

- 1 題詞と歌との関係は、題詞を低く歌を高く書き、作者の氏名は題詞より除き後世の歌集の如く題詞の下方に置いてゐる。
- 2 左注は総べて小字で題詞の下に移し、其の文は意を取り、改めた所がある。

この特徴により「拾穂抄」本文はほぼこの系統の本を底本に用いたと確認出来る。

季吟は「拾穂抄」の底本について次のように記している。^(八)

今予所用之本此仙覚か本をもて妙壽院冷泉殿の校正し給へる本とかや歌の前書作者の書きやう訓点等まことに藤斂夫の所為

しるく

妙壽院・藤歛夫は藤原惺窩を指すが、「歌の前書作者の書きやう」に特徴を認めていることに注目される。

また、「拾穂抄」冷泉亭人（為経）跋文にこの本の伝写過程が次のように記されている。^九

萬葉集之為書也在昔名公卿奉勅所倭歌也爾來伝写之久而往往其誤不為鈔矣我先惺齋有家伝一本取数本校正之秘不出於家時田
玄之懇求之惺齋不得已許之玄之太喜謄写以伝其家及曾孫玄恒与北村季吟有素好故使彼得写之今拾穂鈔所由起也

これに拠れば、惺齋（藤原惺窩）が家伝の本をもとに数本を校合した惺窩本を、門人吉田（角倉）玄之が写し、それを曾孫玄恒が季吟に見せ写させたものを「拾穂抄」の底本としたことがわかる。

これらの資料から武田裕吉氏は「前田家一本の流の改定は藤原惺窩の手に成つたものとして大過はあるまい」とされる。^六

「拾穂抄」独自の特徴も多々あり、本文・訓についても検討すれば違いは少なくないと思われるが、季吟が底本とした惺窩本はこの改定本系と同一であったことは間違いない。

既に述べたように八雲軒本はその祖本（藤原惺窩本）の忠実な写しであると考えられる。確かに惺窩本は校合を経た上に独自の改定を加えたものである。しかしながら冷泉家家伝の本をもとにしていることからするならば、資料的価値は少なからぬものと考えてよからう。

注釈史の上から考えるならば、北村季吟の「拾穂抄」の訓読・注の基盤になったものとして注目すべき本である。また、後に述べる理由から林羅山を経て版本（活字無訓本・活字付訓本・寛永版本）の成立を考える上でも注目すべき本と考えられる。版本は細井本をもととした林道春（羅山）校本を活字化したものとされるが、その細井本の前に冷泉本が想定されていること、羅山の師が惺窩であったことを考慮するならば版本の成立過程の再検討のためにはこの八雲軒本をもととした詳細な調査が必要と思われる。

このような江戸初期の版本成立過程の問題解決の糸口として、まず手初めに惺窩本から八雲軒本への書写過程の背景を探っておく必要がある。それは両者の結び付きを考えて行くと、間に羅山所持の惺窩本を想定せざるを得ないからである。「拾穂抄」

跋文には羅山がこの惺窩本を所持したことは全く触れていないが、それは「拾穂抄」の底本に関する伝写過程を中心に述べたからであり、羅山について叙する必要が無かったからと考えられる。

四、八雲軒脇坂安元について

八雲軒脇坂安元についての基本資料『寛政重修諸家譜』に基づいてその経歴をまとめてみたい。数少ない資料ではあるが、その動向から林羅山との交流の時期を推定し得る可能性があるからである。

父脇坂安治は豊臣秀吉に近習として仕え、天正十一年（一五八三）四月柴田勝家との合戦に功を立て賤ヶ嶽の七本槍と称せられ、山城国に三千石を賜り、後数々の武功を立てる。翌年安元は山城国にて生誕。母は西洞院宰相某の女（金井寅之助氏は西洞院宰相時慶の娘とされる）。慶長三年（一五九八）大阪において徳川家康に謁す（十五歳）。この年秀吉没。同五年正月従五位下淡路守に叙任。この年九月関ヶ原の役おこるが、それに先立ち父と共に関東方に加勢するために近江まで下向するも通路不自由のため果たせず、文書にて家康と連絡を取り、関が原の役の最中に大阪方より関東方に寝返る。翌六年江戸に至り徳川秀忠に仕える。同十一年（一六〇六）先の江戸城の普請を助けた功績により家康より御書・御服を賜る。

定かではないが、この年表に拠れば慶長六年（一六〇一）から十一年（一六〇六）までは江戸に在住したものと思われる。慶長十九年（一六一四）大阪冬の陣参軍。翌元和元年父安治致仕、伊予国大洲の封を襲う。同年大阪夏の陣に戦功を立てる。元和三年（一六一七）大洲から信濃国飯田五万五千石に転ず（三四歳）。同九年秀忠・家光上洛に供奉。寛永三年（一六二六）秀忠・家光上洛に供奉。同年駿府城の守り役を勤める。同十三年朝鮮信使の饗応役を勤める。同十九年『寛永諸家系図伝』編修の際、祖父安明より系譜を起こし、それ以前の姓氏の事を記さず「北南それともしらずむらさきのゆかりばかりの末の藤原」とのみ記し、深く御感を蒙ったという。正保元年（一六四四）四月より一年と二カ月常陸国下館城に在番する。承応二年（一六五二）七十歳で飯田に没す。

極めて少ない資料ではあるが、この中に羅山との交流のあった時期を推定させる記事が何箇所かに見える。それは後にまとめることとし、脇坂安元を知る上で重要なもうひとつの資料に目を向けておきたい。

安元六十一歳の時正保元年四月より常陸国下館城に在番したことを前に記したが、その一年二月の日記が残されている。安元自筆のものは焼失したが、曾孫安清の命により儒臣藤江忠廉が転写本に注を加えたものが残っており、金井寅之助氏によって校合・翻刻されている。^(十一) 安元の生活態度などを知る好個の資料である。

今は安元の経歴関係記事、歌集関係記事、羅山との交流関係記事を中心に摘出してみたい。

経歴関係記事としては正保元年十一月二十五日養子の安吉（後、安政）の病気に心惑わして神々に願いを述べる中の東照大権現（家康）に対する件に

やつがれ十五にして、はじめておがみ奉り、十七にして、つかへたてまつりしより、ミよの御すへ葉のながくつたはり、ほしをいただくとし月のけふになんあひたてまつるも、ひとへに御めぐみの、あめつちにおとらめや。中略 そのことハリをおぼしろしめして、いのちながきをまもらしめ給へ。

ゆく末のも、よ十かへりたのむ哉あづまをてらす神のめぐミを

と記し、それに対する藤江忠廉の注に

公の十五歳の御時、大坂にて東照宮へはじめて拝謁ありけるよし、和田宗允が御行状にも見えたり。慶長五年 公の御とし十七歳正月に 東照宮の台命にて御叙爵あり。此秋すなはち関原乱なり。此乱以前よりすでに幕下したがひたてまつられしなり。乱はじまりて御帰服ありたるやうに諸書にしるしたるハ、まことの事をしらざるものなり。

とある。これらは先の『寛政重修諸家譜』記述を裏付けるものである。なお余談ながらこの神への願いに神代の叙述があり「まどこおふふすま」に触れるなど日本書紀の記事に関する知識が伺える。これは後述する和田宗允（羅山の弟子）を介してのものと思われる。

また正保二年四月二十五日の記事に、空から細かな砂が降って来た時に次のような回想をしている。

おもひいでらる。ながしはやくのとき慶長の元年かとよ、すなふりぬ。のちにきけば、しなの、あさまのたけやけて、まさごはいとなり、風にさそはれしことなり。そのとしのうるふ月の十二日に、地おほきにふりて、ふしみのしろのてんしゆ、やぐらくづれぬ。

この記事から慶長三年大阪で家康に拜謁する前に父と共に伏見城にあったことが知られる。慶長の役前年のことである。その更に四年前文禄元年朝鮮の役に父安治は船手の大将として出兵し、この慶長元年に帰国しており身辺慌ただしい時期であったと思われる。

次に歌集関係記事を見る。安元は正保元年四月二十四日着任後しばらくは城内視察・修理・領地内の検分などで忙しい日々を過ごしながらも折々に歌を作っていたが、六月に入って落ち着き、二十一代集を読み始める。

二日。よ、のうたひろげよみて、つれづれなぐさまんと、けふより古今集を見侍る。

(中略)

四日。古今集をひねもす見る。

この日から暇あるときには歌集に熱中する。同じ月に

二十八日。後撰集よみはじめて、心にうるうたどもを、かきぬき侍る。なしつぼの人、にあふこ、ちぞする。

と、書き抜きを始める。これ以降の歌集は時折書き抜きしたことを記す。十一月一日には歌集に加えて伊勢物語も読み始めている。これらの抜き書きした歌を翌年三月には一度まとめている。

七日。よ、の集、風雅までのぬきがきをゑらびて、か、せぬ。

と記すように祐筆か誰かに筆記させている。しかしながら自筆のものも残したことが四月の記事に見える。

二十八日。よ、のしうの、ぬきがきたるかミどもあつめ、ひようしものして、云々

前日に新統古今集を見終わっていることや、三月七日のものが選択しているのに対し「あつめ」としていることから、この日の抜き書きは自筆のものの可能性は高いであろう。この日つけた表紙が八雲軒特有の丹表紙か否か空想に任せるしかないが、八

雲軒本には自筆の写本の存したことが理解出来る。八雲軒本『萬葉集』の書写は先に記したように原本に忠実であると考えられるが、時に疲れのためか行が左右に乱れたり、またそのような箇所^(十一)に訂正が行われたりしており、専門の書家の手になるものと思われない節がある。この日記に見える歌集への安元の態度からして、八雲軒本『萬葉集』の書写は安元自身によるものではないかと推定される。

次に羅山との交流関係記事を見たい。安元と羅山との交流関係は夙に指摘が有るが、その親密さを確認しておきたい。

安元は正保元年四月二十七日に史記を八月二十七日には日本書紀を儒臣和田宗允に読ませているが、この和田宗允は羅山の弟子であるという^(十二)。この宗允は同年九月五日に江戸へ派遣され、十一月十三日に帰ったが、それについて「見き、しものがたりをするに、なぐさみぬ」と安元は記している。当然江戸の羅山の消息をも語ったものであろう。

羅山との手紙のやりとりは管見によれば四箇所^(十三)に記されている。総て正保元年の記事である。

(七月)二十九日。高力さこんのしやうげんたかながより、ふりふたかご、みなもとのとしたかより、あはび、たいのうを、おなじおりしも、よせらる。このつかひに、民アきやう、その子の春齋より、うつのやまの文、ねんごろにたびたり。まさかへしく、うちもおかれで、なつかしさのいやまさりぬ。

貰った手紙に対する感動がかくも厚いのは、他に目についたところでは養子安吉からのものに対してのみである。文中の「民アきやう」が羅山をさすのは藤江忠廉の注「民アきやうハ、林道春法印の事なり」による。

(九月)二十六日。元俊に、らにのゑか、せて、民アきやうのもとへ、さんのこと葉をこふ。ミづからも、うたよみ侍る。

いにしへの夢路ハさぞな藤ばかまいまも身にしむ袖のうつり香

狩野元俊は内裏・江戸城・大阪城・二条城などの障壁画を書いた絵師である。それに蘭の絵を画かせ、羅山に賛を書いてもらおうとしている。羅山も即座に応じて九日後に返信が着く(江戸とは片道三日の行程)。

(十月)五日。ゑどより、人来る。民アきやうの、らにの絵に、さんかきて、おくらる。すゑの秋といふ字をひろひて、うたをよむ

ことのはのあはれもそひてふぢばかまきて見る袖にほへいく秋

このやりとりで分かるのは、二人の親交の深さと、それが歌によるものであることであろう。そのことは次の記事で確認出来るよう。

(十一月)六日。いにし月、しら川の朝臣へ、うたの返ししたりし事を、しら川よりつたへき、ぬとて、ゆふがほのちまたなるあるじ、うたよみ、詩つくり、からのかみに、かなにて、ミづからこと葉がきして、たぶ。ことばハ玉をつらね、心は竹をわりたるがごとく、なさけハきんせきよりおもく、ちぎりハしつこうよりもつよし、かみのうへのぎんこうてつさく、いとめでたしや。

例によって藤江忠廉の注に「ゆふがほのちまた、林道春法印の別号なり。道春ハ都五条の人なればなり」とある。これは元和元年に羅山が「夕顔巷」の三字を軒号としたのにちなむが、これに対し、惺窩は和歌及び序を贈っている。^(十三)この他に別号があり、あるいは見落としがあるかもしれないが管見に入った記事を抽出した。

先に述べたようにかような贅辞は他に例を見ない。その上この日は「その文にいはく」として羅山の手紙を全文日記に記している。その分量は二十五字詰二十行程であるが、その手紙文をそのまま記すのは格別の扱いである。その文中には「しもだてのしろにもやし給ふわき坂のきみ、ひるよるのまもりのいとま、やまとうたおほくよみて、なぐさみまします」とあり安元の和歌の道を褒めたたえ、それを慕って歌を贈る旨記してある。

これらの交流関係記事を見るに、二人の和歌を通しての深い親交が伺える。惺窩本を安元が手に入れることのできる経路は一にこの交友関係に求められよう。無論藤原惺窩自身からの経路も全く可能性が無い訳ではない。その検証に移りたい。

五、藤原惺窩と林羅山について

前項で脇坂安元と林羅山の親交について触れたが、年次的背景を考慮に入れながら、安元が惺窩本を入手した経過を考察する

ために、藤原惺窩と林羅山の動向を見てみたい。

藤原惺窩が冷泉家家伝の万葉集をもって改定本を校定した時期は全く分からないが、「惺窩先生行状」^(十三)に「兼ねて日本紀、万葉集、歴代の倭歌詩文」などを学んでいたことが記され、細川幽齋・松永貞徳・木下長嘯子などの多彩な交友関係から多くの書を借覧する機会を持っていたことはよく知られている。この惺窩と羅山が知己を結ぶのは慶長九年（一六〇四）八月のことで吉田（角倉）玄之の紹介によるものであった。^(十四)玄之が惺窩に入門したのが天正十六年（一五八七）であるから、「拾穂抄」に記されている惺窩本を玄之が書写したのはこれ以降のこととなる。また羅山が書写し得るのは慶長九年以降となる。この天正十六年から慶長九年までの間に安元が惺窩本を書写した可能性を考えてみたい。「拾穂抄」跋文に記すように玄之が書写する以前は「秘不出於家」とされていたのであるから惺窩自身もめったなことでは書写させなかったと考えられるが、玄之書写本からの伝写を含めて検討してみる。先に記したように慶長元年（一五九六）には安元が伏見城に存したことが日記から推察される。時に安元十三歳。その四年前から父安治は朝鮮に渡っていた。^(十五)父安治は西洞院宰相の娘を妻としており、岳父時慶を通じ都の歌人と誼みを結んでいた可能性は高い。しかしながらこの九歳から十三歳の間に安元が父不在のまま貴重な万葉集を借覧する手だてを持っていたとは考えにくい。更に慶長二年は再び朝鮮出兵の命が下り、父安治は彼の地に渡り、翌三年まで戦っている。この年秀吉の死によってまた世情が混乱し、安元自身も書写の機会があったとは思われない。十四、五の安元にとって父の不在時に惺窩・玄之との交流が可能であったか疑問とせざるを得まい。確かに安元は慶長三年に大阪で家康に拜謁している。惺窩も既に文禄二年頃から家康に講義を行っている。しかし安元の年令、世情などを考え合わすにこの時期は妥当性を欠くと言って良いやに思われる。父安治帰国後は、関東方と大阪方との去就の問題が起こっており、慶長五年には関ヶ原の役に突入する。先に述べたようにこの翌年慶長六年から同十一年までは秀忠に仕え江戸に在住したものと思われる。

この間に羅山は惺窩を師と仰ぎ（慶長九年）、慶長十年頃には惺窩・羅山・長嘯子・貞徳・玄之の間で盛んに蔵書の貸借を行ったという（『惺窩先生文集』巻之十一）。おそらくは惺窩本を羅山・玄之が書写したのはこの時期ではなからうか。

慶長十一年に羅山は伏見城で家康の所蔵本を閲覧。同十二年に駿府から江戸へと向かい、秀忠に講義を行う。翌十三年には駿

府で召し抱えられ、駿河文庫を司る。この時期に安元と知り合う可能性もあろうかと思われるが、确实ではない。少なくとも安元と羅山の交際は、羅山が家康に重んじられたこの時期以降と考えるべきであろう。惺窩本を羅山が写し得た時期と重なるのもこれ以降である。

慶長十八年に羅山は西洞院宰相時慶・喜多院・天海・梵舜・藤堂高虎らと同席し神祇について語り合った。西洞院時慶とは初対面であったというが、安元との接点が増えた事件と言えよう。

翌十九年には駿府の家康の前で、惺窩の遠縁に当たる冷泉為満と同席し万葉集の知識を披露している(『駿府政治録』)。ほぼこの時期に活字無訓本の成立が推定されていること(十五)から、林道春校本もこの頃には完成していたと見るべきである。

明らかに安元との出会いが想定出来るのはこの慶長十九年以降である。したがって八雲軒本から羅山所持惺窩改定本という過程は無いと考えられよう。この年大阪冬の陣に安元は参軍しており、羅山はこの間終始家康の側近にあった(『大坂冬陣記』)。相まみえる機会は确实にあったはずである。しかもこの時羅山は旧事本紀・古事記・名月記・釈日本紀などの本を書写して家康に献じている(『大坂冬陣記』)。この一歳違いの二人にとって話題に事欠かなかったと思われる。

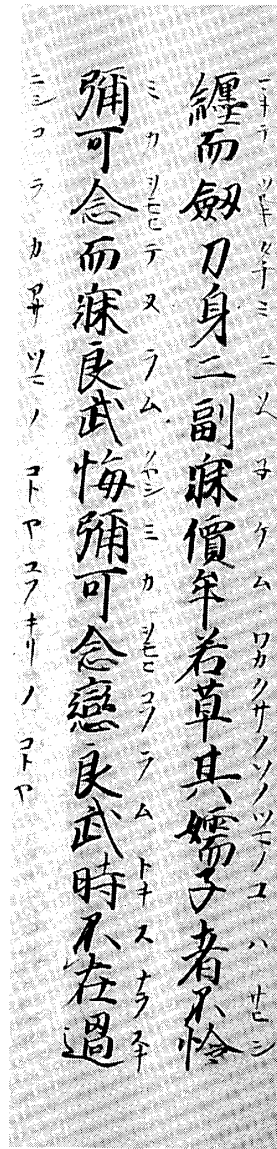
しかし确实に両者が同席したと断定出来る記事は更に下って寛永十三年(一六三六)朝鮮信使来日時である。この時羅山は筆談により信使と問答を行っており、安元は饗応役を勤めているからである。

その始まりがいつとは断定出来ぬにしても、この時期あたりには二人の交流があったと考えてよさそうである。おそらくは慶長年間終わり頃にその端を発していたのではないかと思うが、やがてあの「下館日記」に記されるような厚い親交となっていく過程で、惺窩本の伝写が行われたものと思われる。

六、再び本文について

八雲軒本『萬葉集』が惺窩の改定本から林羅山を経て安元のもとに至ったことを推察したが、確たる根拠に欠ける憾が残る。

それでもなお林羅山にこだわったには理由がある。それは版本の本文と八雲軒本の類似が目につくことと、羅山が師の惺窩の本を無視するとは思えないことによる。林道春（羅山）校本の本文をそのまま活字化したのが活字無訓本であり、その大きな誤りを正して活字附訓本となり、それを整版したものが寛永版本であるが、その元となった林道春校本の素材として、藤原惺窩改定本を再検討する必要があるように思われる。確かに体裁など大きな異なりはあるが、羅山による校定が加えられていることを鑑みて、本文からの見直しが必要であるのは、次の二点による。



図版2 (巻二墨付き三十九丁オ)

巻二・二二七の長歌の中に「不怜彌可念而寐良武」の下に「悔彌可念恋良武」の句があるが(図版2)、これは活字無訓本・林道春校本・細井本の特色である。

巻七・一一九三の次から一二〇八〜一二二二となり次に一一九四〜一二〇七・一二二三となっている。これは版本としては活字無訓本にのみ見える特色である。

これらのことから羅山のもとに藤原惺窩の本が有ったことが推定出来るのである。この惺窩の改定本の詳細な調査が、江戸初期版本の成立過程考察のために、また冷泉家流の本文考察のために、必要な所以である。本文を含めて、それらの考察は次稿にゆずる。

(國學院大學文学部兼任講師)

注

- (一) 小野則秋氏『日本文庫史』(教育図書)
- (二) 金井寅之助氏「八雲軒の下館日記」(『土』金光図書館報90号)
氏は「三英随筆」に「昔は大名衆に数多学文好き有たる由、脇坂殿第一之由」とあることを引用され、江戸時代においても八雲軒脇坂安元の名前が知れ渡っていたことを説かれている。
- (三) 丹表紙は八雲軒本の特徴である。(『日本古典文学大辞典』岩波書店)
- (四) 武田祐吉氏「萬葉集諸本解説」(『校本萬葉集』首巻 岩波書店)
- (五) 『校本萬葉集』十七「諸本輯影」第二百四〇～二百四十一
- (六) 武田祐吉氏「萬葉集諸本系統の研究」(『校本萬葉集』首巻)
- (七) 野村貴次氏「季吟の萬葉拾穂抄」(『萬葉集大成』2 文献篇 平凡社)
- (八) 『萬葉拾穂抄』一之上(新典社版第一巻)
- (九) 『萬葉拾穂抄』二十之下(新典社版第六巻)
- (十) 『新訂寛政重修諸家譜』第十五(続群書類従完成会)
- (十一) 金井寅之助氏「翻刻下館日記」上・中・下(『文林』9～11号)
- (十二) 堀 勇雄氏『林 羅山』(吉川弘文館)による。
注二の金井氏の論文では貞徳門の以悦の弟とある。
- (十三) 林羅山「惺窩先生行状」(『藤原惺窩 林羅山』日本思想大系28 岩波書店)
- (十四) 以下藤原惺窩・林羅山らの動向について『惺窩先生文集』『羅山林先生文集』『駿府政治録』『大坂冬陣記』等の記事について

ては総て堀 勇雄氏の『林 羅山』(注十二)に拠った。

(十五) 父脇坂安治の動きは「寛政重修諸家譜」(注十)に拠る。

(十六) 山田孝雄氏「萬葉集の版本」(『萬葉集大成』2 文献篇 平凡社)

附記

書誌の調査にあたって、本学講師古相正美氏に協力いただいた。記して感謝の念を表したい。